

第3回共生のひろばで感じたこと

道盛 正樹

(NPO法人 大阪自然史センター 理事)

大阪自然史センター（大阪市立自然史博物館友の会が母体となったNPO法人）で友の会事業の世話役を約30年してまいりました。今回の皆様のように、友の会組織では会員がそれぞれ自然を対象にさまざまな形で接して自然に親しんできています。その経験から博物館と博物館を利用する人を考えてみました。

まずは、わくわくする発表が多かったなかで受賞された皆様おめでとうございます。また、惜しくも逃された皆様、それぞれに個性のある時間をかけたすばらしい調査や活動の発表でした。

今回第3回目となる「共生のひろば」は、博物館の周到な準備と皆様の努力の結果で作られていると感じました。

博物館には使命といわれるものに、資料の収集保管蓄積、調査研究、社会教育・普及活動がありますが、主体となる学芸員の皆様の努力だけではその使命は達せられません。収集保管する器の整備、調査研究する資金、それに普及対象となる市民の存在がなくてはなりません。いわゆる財産としての人・物・金それに情報が整って、環境の時代と言われる今日に文化装置としての博物館の存在がクローズアップされると思っています。

そのそれぞれの要素が結集されているのがこの「共生のひろば」でしょう。博物館をきっかけの場として、同好・異分野の人々が相集っておられました。発表の内容には何らかの形で博物館の持つ財産である学芸員の示唆を受け、市民の目線で足元にある自然をつぶさに観察された結果が多く見られました。自然を楽しむ異分野の方々相互触発の可能性があり、ただ知の訓練に終わらせないで、さらに発展を予感させる発表が相次いだことは、自然の奥深さを真剣に観察された結果だと思えます。

このような創造的な活動機会を作られた博物館には、この結果が、より広く社会に還元できるような働きかけをお願いしたいと思います。幸いにも、発表の内容がこの冊子になって配布されこととなっているので、まずは一安心ですが、これに満足してはおりません。発行部数の課題が残りますし、身内や発表関係者など配布先が限られてしまうのも残念です。さまざまな分野の研究や活動がありましたので、世間一般の学会誌への投稿とも参りません。しかし、全国には、同様の調査研究や活動で参考にしたいと思う人が少なからずおられると思います。兵庫1地域の財産として終わらせるのではなく、日本の又世界の財産としていくような試みがはじまっていくのではないかと感じられました。研究や活動をはじめられるアマチュアのかたがたが多くいることが大きく発展していくエネルギーとなると思うところですが、それには博物館がアマチュアナチュラルリストをフォローしていくことから始るのではないかと考えています。この「共生のひろば」全国版を模索しておられるとの副館長の言葉の中にこれからの館のめざす方向に強い意志があるようでした。

河合名誉館長のほんわかと包み込む「共生」のお話から始った今回の共生のひろばは、自然



を慈しみ愛しむ、そして自然への思いをめぐらせるナチュラルリストとしての原点を再び考えるすばらしい場であったと思います。このようなコメントをさせていただく機会を与えていただき、今日は多くのことを学ばせていただいたことに感謝するとともに、このようなすばらしい機会と環境の整った中で、ますます文化財・自然財として共有の財産となる皆様の研究・活動が発展されていくことをお祈りいたします。